

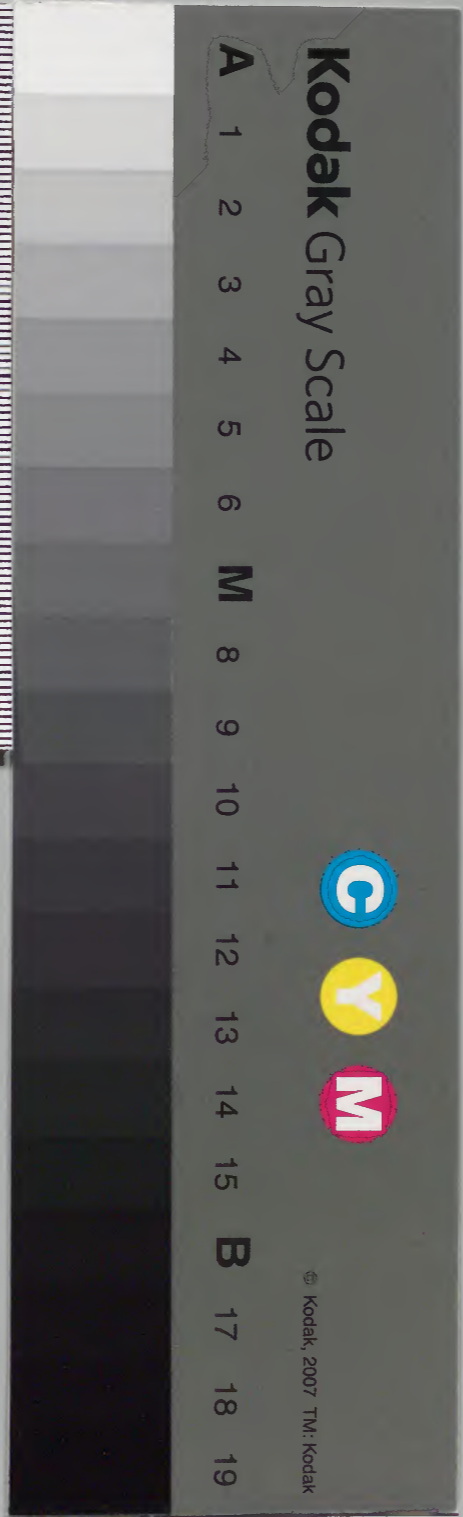
和書

五

和書門類			
二七三	四九	九〇	三〇
冊架	函號	冊架	冊架

內閣文庫			
二七三	四九	三〇	〇〇
冊架	函號	冊架	函架
(九才)			

內閣文庫	
番號	和 27349
冊數	30 (9)
函號	200 127



報凶問 柩人々の

萬葉集卷第五

家乃凶事へ或人

吊いし小の積乃

哥也大伴卿ハ

柩人マ也

禍故わさるひの

重疊かこぢり

累集のさき

也崩心斷腸ハ皆

いなりいしこ

西君大助 あ君

雑歌

神龜五年六月二十三日報凶問

歌一首 太宰帥大伴卿

禍故重疊凶問累集永懷崩心之

悲獨流斷腸之泣但依西君大助

傾命繞繼耳筆不盡言古今所

余能 奈可波 年奈之伎母乃等志流等伎子

よのちり 万須加奈之 可利家理

伊余與麻須 万須加奈之 可利家理

傾命已小危き念

明治十二年購求

万五 一

二鼠競走 昏夜日月乃...
 四地重侵 涅槃經二十四日四大毒蛇盛之一箇令入養館瞻視卧起
 若一蛇生 讀惠者我當准法戮之都市 弘決一妙樂大師釋曰哭
 成身如一箇 一大不調能令犯重故謂都市 仙地水火風三毒蛇譬
 過際之駒 所以人生乃...
 紅顏 三從 婦人...
 嗟乎痛哉 紅顏共三從 長逝素質與
 甲德 永滅何圖 借老還於要期 獨飛
 生於半路 蘭室屏風徒張 斷腸之哀
 彌痛枕頭 明鏡空懸 淚滴之淚逾落

羅周札註言詞令徳ハ

貞順功兼麻客婉婉

借老還於要期

ハ老をさし小せよの

借老ハ毛詩乃也

獨飛 比翼乃... 雙飛獨飛

蘭室屏風徒張 園乃... 泣此

漆筠之淚 血淚... 泉門 黃泉

愛河波浪 恩... 泉門 黃泉

世乃生老病死苦 愛別... 從來厭離

從來厭離

泉門一掩無由再見嗚呼哀哉

愛河波浪已先滅苦海煩惱亦無結

從來厭離此穢土本願託生彼淨刹

しりて云々婦人のあゝ家
と妻屋と云一書と云
つらんこゝろ松つて
よと云東さあくと
さひくこね乃家よ
ゆまへもふ親せん
くまひり 日本紀釋云
端清也慶義之詞也
切のこゝろふのこ
乃後命ささる小孫
色きんひさしめは
心のあわさるま
世つさるこ
わりのしりて云々
悔まはるこ短命の
時し知りしりて云々の

都摩夜 佐文斯 父於母保由倍斯母
伴之伎與之加父乃未可良尔之多比已之
伊毛我 已許呂乃須別毛須別那九
父夜斯可母 阿平介與斯
父奴知 許等其等
阿布知
わらわくあふこまひいさ
大野山 紀利多知 和多流 和何耶宜父
おろりこまひいさわらわく
於伎蕪 可是 紀利
おろりこまひいさわらわく

万五五

己也のあがりハ事乃と云我河牛の
ついで月山あひまわこつひて
云々東をたふすもの
いさるりまはるの
おが野の旁立わ
林麋乃海ハ
乃乃凡人乃息也
我はく息小乃海
也彼大野山の旁を

人或 知有父母忘於孝養 不顧人倫
輕於脫屣 自稱離俗 先生意氣 雖揚
青雲之上 心志猶在 塵泥中 未驗修
山上臣憶良
反惑歌一首并序并短歌

知有父母忘於孝養 不顧人倫
輕於脫屣 自稱離俗 先生意氣 雖揚
青雲之上 心志猶在 塵泥中 未驗修

こころ持してりそり文
 仙目谷ありけり人
 こころ父母のちかひけり人
 天のゆくはあまのついでに
 月乃照して下やりいりありは
 風乃ちかひの國乃ちかひの
 只向あしきつるは極まりと限と
 但日本より奈何乃三文字あり
 天のゆくはあまのついでに
 月乃照して下やりいりありは
 風乃ちかひの國乃ちかひの
 只向あしきつるは極まりと限と
 但日本より奈何乃三文字あり
 天のゆくはあまのついでに
 月乃照して下やりいりありは
 風乃ちかひの國乃ちかひの
 只向あしきつるは極まりと限と
 但日本より奈何乃三文字あり

迦文尔 保志伎麻尔
 斯可尔波阿羅慈迎
 斯可尔波阿羅慈迎

こころ持してりそり文
 仙目谷ありけり人
 こころ父母のちかひけり人
 天のゆくはあまのついでに
 月乃照して下やりいりありは
 風乃ちかひの國乃ちかひの
 只向あしきつるは極まりと限と
 但日本より奈何乃三文字あり
 天のゆくはあまのついでに
 月乃照して下やりいりありは
 風乃ちかひの國乃ちかひの
 只向あしきつるは極まりと限と
 但日本より奈何乃三文字あり
 天のゆくはあまのついでに
 月乃照して下やりいりありは
 風乃ちかひの國乃ちかひの
 只向あしきつるは極まりと限と
 但日本より奈何乃三文字あり

反歌
 思子歌一首并短歌
 山上臣憶良

釋迦如來金口正説等思衆生
 如羅睺羅又愛無過子至極大
 聖尚有愛子之心况平世間蒼
 生誰不愛子乎

本小法万金口とん
佛言と貴く金口と

之り

等思衆生 二れ涅槃經
鳥喙品乃文、但視
衆生とあり

うりてめ、凡食のこ
うりてめ、衆も食
はりて子も力も
をりて

うりてめ、子も力も
うりてめ、子も力も
うりてめ、子も力も
うりてめ、子も力も

宇利 波米婆 胡藤母 意母保由 久利
うりてめ、子も力も

斯農波由

めい、ちて、志の、い、つ、り、す

物能曾 麻奈迦比介 母等奈 可
利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

利提 夜周伊斯 奈佐農イ 志の

万五八

哀世間難住 け序具
本二日 未難排八大

辛苦難 遂揚盡百年
賞樂古人所歎今亦

及之 所以因
とあり八大辛苦

人間乃 八苦と云ふ
二毛之歎 文選潘安仁

秋興賦 序曰余春秋
三十有二始見二毛註二

毛髮始有二白毛
人あまぬハ、人あま

ち、あまぬハ、人あま

ち、あまぬハ、人あま

ち、あまぬハ、人あま

ち、あまぬハ、人あま

ち、あまぬハ、人あま

同年七月二十一日世間難住歌一首
并短歌并序 嘉摩郡
撰定之

山上臣憶良

哀世間難住 所以因作一章之歌
以撥二毛之歎其歌曰

世間 周幣奈伎 物能 年月
よのかれ、す、あまぬハ、人あま

あまぬハ、人あま

あまぬハ、人あま

あまぬハ、人あま

あまぬハ、人あま

あまぬハ、人あま

あまぬハ、人あま

あまぬハ、人あま

隔漢之戀漢天河
 也女子天漢之隔也
 抱梁之意 莊子尾
 生人 抱梁之意
 待披雲耳 蓬蓬
 遇小燭然 如披雲見日 徐幹中論 海之
 龍名 善註曰周禮曰凡馬八尺以上為龍 元
 龍名 善註曰周禮曰凡馬八尺以上為龍 元

之戀彼傷抱梁之意唯羨去留
 無恙遂待披雲耳
 多都能馬母伊麻勿愛之可阿遠尔與志
 伊昧
 多都能馬母伊麻勿愛之可阿遠尔與志

百五十一

孫枝 文選註 銑曰孫
 枝側生枝也
 余託根遙鳴之崇巒文
 選替康琴賦之

答歌二首 大伴淡
 大伴淡等謹狀 梧桐日本琴一面對
 孫枝也 此琴夢化娘子曰余託根遙
 鳴之崇巒 旃九陽之休光長帶烟

乃より列ねしとこしとわれのこころも列ねり
敬承德音 功德有りてとこしとわれのこころも列ねり
片時覚やうとこしとわれのこころも列ねり
附公使 中衛今乃近衛之聖武帝乃天平中
二年一初とて中衛を以て大進忠とす
跪承芳音 返簡の御
嘉惟交深 嘉の善也
惟ハ悦也 嘉の善也
ちを中しとてとす
心とてとてとてとて
龍門之恩 後漢の李膺
膺子容接せし
士と登龍門と号

答書并歌一首

中衛大將藤原卿
謹言跪承芳音嘉惟交深乃知龍門之恩復厚蓬身之上戀望殊念常心百倍謹和白雲之什以奏野鄙之歌房前謹狀

方五十三

蓬身 乃とひれとて
乃知く荀子曰蓬生
麻中不投自直 我身れく容接せし
戀望殊念 中れあり野鄙之歌ハソヤ
白雲之什 什ハソヤ
汝ハ有蓬之氣このありて前漢書より
こころにねまふはありとわらせし
しる中乃今と月ち小とめい

十一月八日 謹通 專門記室

こころにねまふはありとわらせし
しる中乃今と月ち小とめい
十月八日イキ下小附還使大監之行り
大監大宰大監とて友念今

中衛大将の河に附るる石を以て
謹通 尊門記室

その門とハハレキヤウ
心河記室の書記
古学をとりて直小

つを修りて記室ま
てて道丁のヨリ
事物紀元曰漢書百官

志曰王公大将軍幕府
皆有記室掌草書記
鎮懐石懐胎をちつめ

怡土郡 日本紀三六伊
都郡こり

詠鎮懐石歌一首并短歌并序

那珂郡伊知郷兼嶋
建部牛麻呂傳之
山上臣憶良

筑前國怡土郡深江村子員原
臨海丘上有二石大者長一尺
二寸六分圍一尺八寸六分重
十八斤五兩小者長一尺一寸
圍一尺八寸重十六斤十兩並
皆墮圓狀如鷄子其美好者不

有二石一々むをそこ
墮圓狀如鷄子
くまをたれあよの女

息長足日女命
神切皇座乃乃り
日本紀九曰千時也適

當皇后之開胎皇座
則取石挿腰而初之
日事竟遷日産於茲

土其石今在干伊都
照道造

りや小
新可畏し
かみのこし 足姫を貴
て神の命とす

万五十四

可勝論所謂徑尺壁是也去深
江驛家二十許里近在路頭公

私往來莫不下馬跪拜古老相
傳曰往昔息長足日女命征討

新羅國之時用茲兩石挿著神
中以為鎮懐所以行人敬拜此

石乃作歌曰 或云此二石者肥
石當占 而取之 阿夜尔

かみのこし 足姫を貴
りや小
新可畏し
かみのこし 足姫を貴
て神の命とす

帥老 旅人卿
氣淑風和 淑氣和凡

皆春乃クク一さこ
梅用鏡前之粉 梅の

うろくく一さこ
後よひくくわ粉を

蘭葉佩ほ之香 説文

日蘭香草也花常在
春初離騷曰秋

蘭以為佩 蘭を

多のくせふ香の
ろまかりくく唐よハ

松掛羅 定あうらゆ
く出松はうす物と

十二首并序

天平二年正月十二日萃于帥老

之宅申宴會也時初春令月氣淑

風和梅披鏡前之粉蘭葉佩後之

香加以曙嶺移雲松掛羅而傾蓋

夕岫結霧鳥封殼而迷林庭舞新

蝶空歸故雁於是蓋天坐地促膝

飛觴忘言一室之裏開於煙霞之

外淡然自放快然自足若非翰苑

何以摠情請紀落梅之篇古今夫

何異矣賦園梅聊成短詠

大貳紀卿

じけきしうらま乃ちうらま

鳥梅 多勞之岐平倍米

うめをかりつうみせむへめ

鳥梅 期等

うめ乃ち今乃ちうらま

和我 阿利己世奴加毛

わくへりうらまのうらま

主策記云千歳松樹蓋而
視之有知偃蓋一蓋

夕岫 岫内有岩也

殼 余雅云須共母而食

謂之殼 口ナギ

蓋天坐地 酒徳頌幕

天席地 一室之裏 一室

蘭亭記曰悟言一室之内

開於煙霞之外 淡然仙回

梅の花はさきくはなると
 けささくはつてきてこ
 ありあつくは成てし
 小の砂字
 ようつたはまきふふ
 年ハ子ハ消のま
 日と消ハまども云
 多乃とまども云
 まちまじうし
 うしむいし
 梅をさしてまき詩り
 け祥ありとよしおち
 く火を寝もせし
 也
 うめ乃花おて
 心ゆ

梅乃花はさきくちりあは
都伎区 佐久良波奈
 流さきくさくつく成
奈利
 萬世 得之波涼布
 筑前、佐氏子首
スチカミ
 ようつたはさきくちりあは
佐吉
 一ゆきとちりあは
宇才 或板
 壹岐守櫻氏安麻呂
宇倍母
 梅の花
 昔年をちりあはさきくちりあは
 神司荒氏稲布
カシキアラ
 うめ乃花おてしつせしとちりあは

大令史大宰乃属官也
 うめ乃花に春の
 小の春年こまこ奇
 林乃枝まじりけ集
 多乃とまども云
 雨の多あり
 うめ乃花今とちりあは
 他抄曰くまき百鳥
 張多しこりまじ
 也一也
 春事ハ多し
 多しとまども云
 同もいし
 小虎月記をさき

りゆりゆりゆりゆり
得志能波
 大令史野氏宿奈麻呂
 うめ乃花今とちりあは
古保志
 小令史田氏肥人
 うめ乃花今とちりあは
波流 佐良藻
 醫師高氏義通
 梅乃花
 うめ乃花今とちりあは

こととれ年とそ
 多麻之未能 許能可波加表尔伊込波河礼騰
 多多勢流
 松浦娘
 更贈歌
 蓬客

多麻之未能 許能可波加表尔伊込波河礼騰
 多多勢流
 松浦娘
 更贈歌
 蓬客

法し又安云わりの小鮎
 也 亞東妹の杖を我
 子小走也りのあ
 とを我り思ふまらぬ
 春されわりの里の
 我家里也かまはらば
 若鮎翁の序考を
 我り思ふまらぬ
 追和歌三首
 帥老 大伴弼

更報歌 松浦娘
 和可由都流
 追和歌三首
 帥老 大伴弼

八月天皇遣大將軍大伴
連鞍手彦領兵數萬伐
千高麗鞍手彦乃用
百海計打破高麗
悵然なげくこと
黯然イ黯然モイヌ也
領中仙日遊仙嶺註曰領中悵子也單曰領中狹曰
悵子也春著領中秋著悵子婦人頭饒也其東師乃家乃
當時五節乃流妓八裙帶領中より牙をわさるる也禮の
形もまゝの色又曰いれ或ハ肩中領もいさよと云ふ肩の
こぼつ人さうと云ふ罪をば人さうと云ふ罪をば人さうと云ふ
曰松浦縣東批里有按捺岑寂項有沼計可半町俗傳云昔者檜前
天皇之世遣紗手比古領任那國千時奉命經過此墟於是條原村
有娘子名曰乙等比賣容貌端正孤為國色紗手比古便媿成誓
離別之自乙等比賣
登此嶺舉懷招因

作歌曰
得保壽必等
此例布利之
いさよよりおつるやれ名
比菜 胡比
領中仙日遊仙嶺註曰領中悵子也單曰領中狹曰
悵子也春著領中秋著悵子婦人頭饒也其東師乃家乃
當時五節乃流妓八裙帶領中より牙をわさるる也禮の
形もまゝの色又曰いれ或ハ肩中領もいさよと云ふ肩の
こぼつ人さうと云ふ罪をば人さうと云ふ罪をば人さうと云ふ
曰松浦縣東批里有按捺岑寂項有沼計可半町俗傳云昔者檜前
天皇之世遣紗手比古領任那國千時奉命經過此墟於是條原村
有娘子名曰乙等比賣容貌端正孤為國色紗手比古便媿成誓
離別之自乙等比賣
登此嶺舉懷招因

後人追和歌一首 姓名未詳

万五 廿九

以為名 童蒙抄同
やまれ名とついつけさ
いれ格乃名と云々人
こころと云 け山の土
最後人 おり後人との
一しうふ最後人との
次又最と云と云
よりのたつちあつけ
語續しう乃の助
まじげの嶽之山上
沈ちるを嶽こりのの
凡土託り有沼と云
うかりののちゆく
奥後抄云うかりと
い海をり也と云い
少ハ領中拵之

やまれ名とついつけさ
この山乃へりいさよをさりん
最後人追和歌一首
姓名未詳
郡夏 詩能多氣
いさよよりおつるやれ名
最最後人追和歌二首
姓名未詳
宇奈波言
うかりののちゆく
此礼 布良斯 家武
いさよよりおつるやれ名

り我のこけうまを
わくつふ仙白を
葉葉人らわくを
そのこと 八雲抄云
海松乃やふ破て
可と布こ六つれの名
とりふもと八云又書
うけさうれ 秘を氣
和と氣又安云わけ
さうれ 破れりり
おのり葉葉うけ
あせつ伏屋の類
仙白のうまを
わくつふ仙白を
又安云ののこ
さうりやまを

布御伊保能 麻宜 伊保乃 内 尔 直
あせつ伏屋の類 仙白のうまを
土 尔 葉解 敷 而 父 母 波
しちよ わくつふ仙白を
松乃可多 尔 妻子等母波 足 為 方 尔
花乃 居而 憂 吟 可麻度乘猪
火氣 布後多受 許之伎 尔波 又毛能
須可伎 飯 炊 事 毛 和須礼 提
奴延鳥乃 能 行 與 比 居 尔 伊 等 乃 伎 提
短 物 半 端 伎 流 等 云 之 如
楚取 呼 比 奴 可 又 波 可 里 須 部
來 立 呼 比 奴 可 又 波 可 里 須 部

万五 世六

ちまうか 仙白角を
とらくれ小作の巻
又安云ののこ
と化の巻 九巻の
ひつちよ 土巻の
うき ねむすこ
いりく ねむすこ
えく 飯をい
ねく 名ののこ
楚取 叶本ま
いりく 仙白
あさり
かきり
世の
世

及歌
世 間 半 半 之 等 夜 依 之 等 於 母 倍 行 母
世 乃 亦 之 等 夜 依 之 等 於 母 倍 行 母
飛 立 可 祢 都 鳥 尔 之 安 良 祢 婆
いりく ねむすこ
えく 飯をい
ねく 名ののこ
楚取 叶本ま
いりく 仙白
あさり
かきり
世の
世

ねんはひのさあ
 神つかり 足安云神集
 出乃わくす小海すわ
 神の涌出ゆい
 少あめ小 船軸糸一云布
 奈能関糸一云本殿
 見安フ子一云法徳
 輪明神のあす 五系大
 國玉神ハ大已貴神の内名あり 日本紀一云り 女さゆハ云あり
 事あてく 人日小 使乃事とりて 還朝せし せんすり
 延乃字小 尚道乃 墨繩の たる如く 身すく あり
 ありて ありて ありて 墨繩を 妻の本末 ありて 足安ハ 直さ ありて ありて
 ち乃乃 油あり 仙肥前國松浦郡近海乃 油あり 玉煉ハ 泊也
 つこあく 足安云つ 志分る 墨系 恐進多 ありて ありて ありて ありて

日者 又更 大御神等
 舟 御手打 掛 舟 墨 繩 遠
 播倍多 留期等 久 阿庭可 遠志 智可能
 欲利 大伴 御津 濱 備
 多 太 泊 美 船 播 將 泊 都 人 義
 無 久 佐 佐 久 伊 麻 志 成 速 歸 坐 執
 ありて ありて ありて ありて ありて ありて

万五 飛八

ち乃乃 油あり 仙肥前國松浦郡近海乃 油あり 玉煉ハ 泊也
 つこあく 足安云つ 志分る 墨系 恐進多 ありて ありて ありて ありて
 ねんはひのさあ
 神つかり 足安云神集
 出乃わくす小海すわ
 神の涌出ゆい
 少あめ小 船軸糸一云布
 奈能関糸一云本殿
 見安フ子一云法徳
 輪明神のあす 五系大
 國玉神ハ大已貴神の内名あり 日本紀一云り 女さゆハ云あり
 事あてく 人日小 使乃事とりて 還朝せし せんすり
 延乃字小 尚道乃 墨繩の たる如く 身すく あり
 ありて ありて ありて 墨繩を 妻の本末 ありて 足安ハ 直さ ありて ありて
 ち乃乃 油あり 仙肥前國松浦郡近海乃 油あり 玉煉ハ 泊也

反歌
 大伴 御津 松原 可吉 掃 成
 和礼 立 待 速 歸 坐 勢
 難 波 津 尔 義 船 泊 農 等 吉 許 姓 許 獲
 糸 解 依 氣 成 多 知 婆 志 利 勢 武
 惟時七十有四 憶良
 山上憶良
 惟時七十有四 鬢髮班白 筋力 尪羸
 不但年老 復加斯 病 諺曰 痛癢 灌鹽
 短杖 截端 此之謂也 四支 不動 百節

あつさしひのこいさめ
 老病乃うまひをわし
 身もあつたはなれ
 りくさくさく雲霞の
 香のいねのうさぎ
 こく乃風神
 じふさくさく
 又安云うさぎさや
 ねの子小さうりね
 東せんくさく苦け
 まつた毒いもんこ
 こ子たふさうりね
 えせす
 一人の家れ子
 まつた毒いもんこ
 也富家の子まの葉

反歌
 奈具枕草留心波奈之 尔 雲 隠
 あつさしひのこいさめ
 鳴往 鳥 乃 林能尾志 奈可由
 用 藥母奈又 苦 志久阿礼婆出波之利
 伊奈々等 思 騰 詩良尔作夜利奴
 いあつさしひのこいさめ
 富 人 能 家 能 子 等 能 伎 留 身 奈 房
 子 子 能 乃 子 子 能 乃 子 子 能 乃 子
 父 多 志 須 都 良 年 綿 良 波 母
 鹿 鹿 妙 能 布 衣 遠 陀 尔 伎 世 難 尔
 可 久 在 歎 敢 世 年 周 弊 遠 奈 房
 水 沫 奈 須 微 命 母 榜 繩 能
 子 子 能 乃 子 子 能 乃 子 子 能 乃 子

耀あつさしひのこいさめ
 空と栲一栲人綿綿
 有るも云我子まを
 一いさくさく
 何のぬのきぬ
 又安云うさぎさや
 ねの子小さうりね
 東せんくさく苦け
 まつた毒いもんこ
 こ子たふさうりね
 えせす
 一人の家れ子
 まつた毒いもんこ
 也富家の子まの葉

千人尋 尔母何等 慕 久良 志都
 倭又半 纏 敷 母 不在 身 尔 波 在 等
 十年 亦 母 可 等 意 母 保 由 留 如 母
 ちとせしむり
 此一首神龜二年雖作之更載茲
 戀 古 日 之 名 歌 三 首 短 長 二 首
 山上臣憶良
 世人之貴 慕 七種之
 宝 毛 我 波 何 為 和 我 中 能
 産 礼 出 有 白 玉 之 吾 子 古 日 者
 明 星 之 開 朝 者 歎 多 倍 乃
 何のぬのきぬ

